

知られざる明治時代の漢詩人北条鷗所について —その一略歴—

王 宝平

今日、北条鷗所といえば、知っている人はあまりいるまい。文学界でも彼に関する研究が皆無に近い現状で、鷗所は「忘却」される存在となっているようである。しかし、百年前の彼は、北京駐在外交官井上陳政や上海総領事館総領事小田切万寿之助と肩を並べて、中国通の三才と称えられるほどの有名人であった⁽¹⁾。幸いなことに、神田喜一郎が『日本填詞史話』（二玄社、1965年）や『明治漢詩文集』（筑摩書房、1983年）に北条鷗所の項目を設け、彼の文学的才能を紹介しているおかげで、鷗所の名を幾許かはわれわれの記憶に留めておくことができたのである。

小論はあまり知られていない鷗所の略歴や上海滞在中の文化活動を探求し、それを通じて、明治前期に中国で行われた文化交流の一齣を明らかにしたい。

一 鷗所の略歴

北条鷗所は明治時代の漢詩人、官吏。名は直方、字は方大、号は鷗所以外に、碧海舎人・狎漚生・石鷗がある。慶応2年（1866）9月江戸（現、東京）に生まれ、幼にして漢学を島田篁村に、詩文を森春濤に学ぶ。長じて東京外国語学校で中国語を修めた。当時の東京外国語学校の教員に一等教諭、著名な中国語教育者潁川重寛がいて、門下から速水一孔・小田切万寿之助・中田敬義・御幡雅文・鄭永邦等、その後中日関係の第一線で活躍を見せたエリートが輩出した。鷗所もその門下生の一人であった⁽²⁾。筆者は、鷗所の学級を明らかにすべく、『東京外国語学校沿革』（東京外国語学校、1932年）を調べてみたが、同付録所載の明治7年3月付け「東京外国語学校官員並生徒一覧」、および明治12年～17年3月の卒業生一覧では、鷗所の名が見つからなかった。しかし、明治15年5月～明治17年7月、東京外国語学校で教鞭を執っていた中国人教師閔桂林が帰国する際に、鷗所から「送閔桂林先

知られざる明治時代の漢詩人北条鷗所について

生婦清国」⁽³⁾ という律詩 2 首が贈られ、そのうち「三年鬻舎感恩深」という句があるので、関桂林に 3 年間教わり、明治 17 年（1884）7 月以降に卒業したことが察せられる。

のち、在中国日本公使塩田三郎の知己を得て、1886 年から 2 年ほど中国へ来遊した。塩田は東京浜町出身、幕府医官塩田順庵の息子で、維新後政府・外務省に出仕。明治 14 年（1881）から条約改正交渉に当たる。明治 18 年（1885）駐清国特命全権公使として中国に駐在し、琉球問題等の交渉に努めたが、4 年後 1889 年 5 月 12 日に北京にて死去⁽⁴⁾。享年 47 歳。鷗所はいかなる経緯で塩田の知遇を得たか、つまびらかではない。

鷗所は帰国後明治 21 年（1888）、宮城控訴院書記に任じ、仙台高等裁判所書記長より大審院（のちの最高裁判所）書記課の長を務める地位まで登った⁽⁵⁾ 同 11 月に高等官五等と叙される⁽⁶⁾。高等官は、親任官（総理大臣等）、勅任官と奏任官に分けられ、そのうちの勅任官は 1 等～2 等、奏任官は 3 等～9 等に分けられている。鷗所は後者の 5 等に任じられた。さらに、同 12 月に栄典として正七位より従六位に昇る。興味深いことに、同じ時期にその後著名な学者となる山口高等学校教授小柳司気太、第四高等学校教授西田幾多郎も正七位から従六位に叙された⁽⁷⁾。官吏として順風満帆で、ますますの大任を委嘱されそうになったのも束の間、1905 年 7 月に肺病に罹り突然死去。40 歳の人生の盛りであった。新聞では「北条直方氏は一昨日十六日午前九時過ぎ病死したり」⁽⁸⁾ とさっそく報道している。

あまり突然の訃報に堪えられず、鷗所の親友上村才六は「哭鷗所先輩」という漢詩 4 首を撰して、心の痛みを表している⁽⁹⁾。

哭君今日用何辞 泉下尋盟必有期

同甲人間同意氣 心交夙許未逢時

（君を哭す 今日何を用（も）って辞せり 泉下に盟を尋ぬれば 必ず期すこと
有らん

甲を同じくする人間 意気を同じくせり 心交夙に許す 未だ逢はざる時より）

と二人は同年で意気投合の間柄であったことがわかる。

平生詩句尚空靈 異彩略同刀発硯

芝浦煙波残月白 臨終笑誦法華經

(平生の詩句 空靈を尚(たつと)び 異彩略(ほぼ)同じくす 刀の発研(はつけい)するに

芝浦の煙波 残月白く 終わりに臨んで法華經を笑誦す)

と鷗所の詩風「尚空靈」の特徴を指摘し、法華經を読みながらこの世を去った様子を描いている。

彼蒼蒼者果無情 嘔血使君空有名

憶得虫声如雨夜 星陵剪燭聽秋声

(彼の蒼蒼たる者は果たして情無きや 嘔血 君をして空しく名有らしむ

憶ひ得たり 虫声の雨の如き夜 星陵 燭を剪りて秋声を聴く)

と才能あふれる鷗所の早世を悼み、二人の交誼を思い出している。

万首留詩足以豪 剩看絶筆画崇高

魂来髣髴芙蓉頂 俯聽天風与海濤

(万首の留めし詩は以て豪とするに足る 剩(あまつさ)え絶筆を見るに 崇高を画(えが)く

魂は来たる 髣髴たる芙蓉の頂きに 俯して天風と海濤とを聴かん)

と鷗所は亡くなったものの、多数の自慢できる傑作を書き残し、時折世間に帰り、富士の頂のあたりから見おろし、われわれと共に「天風」と「海濤」の音を聞いているだろうという。

上村才六(1866—1946)は、名は才六、号は売劍、別号は詩命楼、陸奥(現、盛岡)出身。明治・昭和時代前期の新聞人、漢詩人。「盛岡日報」を創刊。上京して「小国民」を編集、少年言文一致会を創立、「文字禪」(のち「漢詩春秋」)を発刊した。1904年に上村才六は大久保湘南⁽¹⁰⁾と共に仙台にいる鷗所を訪ね、二人は東京で雑誌を発刊して役職に束縛されぬような生活を送っている。鷗所は「湘南・売劍両兄来訪、賦之索和」や「重賦」という漢詩2首を吟じ、唱和を求めた⁽¹¹⁾。また、「月夜次湘南韻」「送売劍遊清韓、次留別韻」「黒上雲水庵集、次湘南韻」という鷗所の詩もあり⁽¹²⁾、3人は気の置けない摯友とも伺える。

そして、翌年1906年7月1日、漢文学者結城蕃堂(1868—1924)等が発起人と

なり、副島種臣（1828—1905）、長岡護美（1842—1906）、岸田吟香（1833—1905）、勝間田鉄琴（1843—1906）、巖谷一六（1834—1905）、山田新川（1827—1905）、野口寧斎（1867—1905）、金井秋蘋（1864—1905）、北条鷗所（1866—1905）、長谷川城山（1863—1905）など、ほぼ一年のうちに逝去したこの10人の詩仙のために追薦会が偕楽園で行われた。遺族や中田敬義、森槐南等の友人が来会し、詩人を偲んだ⁽¹³⁾。

鷗所は早世のせいか、著書は『函館竹枝』しか現存しない。中国留学に出かける前年の1885年に、金港堂よりの発売であった。函館の風俗・人情等を歌った漢詩が24首収録されている⁽¹⁴⁾。巻末に東京滞在中の中国の文人張滋昉による批評や題辭が載せてあり、前者では、「清詞麗句必為隣、北海風土於斯可見一斑。乙酉十月」（清詞麗句、必ず隣を為し、北海風土、斯に於いて一斑を見る可し）とあり、後者では、「雲濤煙浪、蛋雨蛮煙、都収入奚囊中矣」（雲濤煙浪、蛋雨蛮煙、都べて奚囊の中に収入す）とある。乙酉は、本書の刊行年、明治18年（1885）に当たる。その他、『北清見聞録鴻泥』⁽¹⁵⁾『九梅草堂集』もあるというが⁽¹⁶⁾、所在が分からない。刊行には至らなかったのであろう。

鷗所は著書の代わりに、管見の限り、下記のような漢詩が散在している。

- ア. 『新文詩』（森春涛編）。第90集（明治16年、1883年1月）「醉落魄・春夜⁽¹⁷⁾」。
- イ. 『新新文詩』（森春涛編、茉莉詩店）。第5集（明治15年10月）「繡帶兒・初夏過墨陀」、第7集（明治15年12月）「柳含煙・閨詠」「喜遷鶯・同上」、第8集（明治16年1月）「尋芳草・暮雪」、第14集（明治16年7月）「滬上客中清明」。
- ウ. 『古今詩文詳解』（東京：成章館）。第81集（明治16年2月）「冬日雜詠」「思越人春寒詞」、第98集（明治16年8月）「雜句」、第99集（明治16年9月）「自画小品三首節二」、第104集「一絡索・秋懷」「貧也樂・秋思」「婦自遙・冬夜」「一絡索・臥病」、第105集（明治11月）「相見歎・閨詞二題」「減字木蘭花・春夕」、114集（明治17年1月）「双調南歌子・春雨詞」「同調」、129集（明治17年6月）「昭君怨四闋・秋夕詠懷」、第142集（明治17年11月）「送閨桂林先生歸清国」（7律2首）。

- エ. 『新詩綜』(東京:鳴皇書院)。初集(1899年4月)「鎌倉客棧次勝間田太守韻」、第3集(1899年6月)「沼津離宮謁東宮殿下賜茶菓既退恭賦」、第6集(1899年9月)「遊総六首」、第8集(1900年9月)～第12集(1901年2月)上海滞在中の漢詩を「鴻泥餘痕」欄にて連載。
- オ. 『明治名詩鈔:十二家選』(森川鍵蔵編、鷗夢吟社、1915年)。「鷗所詩」(高島九峰選)の巻に「寄必山翁」「海気館書懷」等の漢詩77首所収。
- カ. 『明治漢詩文集』(神田喜一郎編、筑摩書房、1983年)。「名月院」「古中秋月色殊佳、用巖道甫中秋韻」「舟発瓊浦」「芝罘」「溯白河」「園明園欖古」「北遊至張家口」「遊総六首」「同種竹山人遊松島」。そのうち、「名月院」「古中秋月色殊佳、用巖道甫中秋韻」「同種竹山人遊松島」は上記の『明治名詩鈔:十二家選』に由来しているらしい。
- キ. 『日本填詞史話』(神田喜一郎、二玄社、1965年)。「三十九北条鷗所」「四十二槐・竹両家の角逐」に、上記『新文詩』第90集、『古今詩文詳解』第104集・第105集・第114集・第129集・第142集、『新新文詩』第5集・第7集・第8集の詞を掲載。
- 管見の限り、鷗所の漢詩は次の資料にも見られる。
- ク. 『羽北遺稿』(3巻、佐伯真満著、仙台:伊藤安右衛門、明治27年・1894)。
鷗所は下巻にて詩評を書き、同別集に「送羽北仙史游北海道」という漢詩を寄せる。
- ケ. 『朝日新聞』。1904年1月18日付けの「啜茗雅集」コラムに、天竜の「甲辰新年有作索和」という詩に対し、寧斎、蓄堂、槐南等の詩人が和作を書く。
鷗所も「次韻」という律詩一首を贈る。
- コ. 『読売新聞』。1904年8月6日付けの「崑山片玉」コラムに、鷗所の「湘南・壳劍両兄来訪、賦之索和」7律一首、「重賦」5律一首がある。
- そして、中国の『申報』には、鷗所上海滞在中の50余の漢詩が掲載されている。
1. 1886年9月7日「申浦客次邂逅新農先生、喜賦即請大雅祭政」
 2. 1886年9月8日「将之申浦、留別駱亮甫先生」
 3. 1886年9月9日「小作数章、録請桂笙仁翁先生吟壇雅政」(「読桃花扇伝奇」

「秋夜懷人」「一絡索」を所載)

4. 1886年9月13日「申江客次呈桂笙先生、即請吟壇削政」
5. 1886年9月14日「秋懷四闋、調一痕沙、録請桂笙夢畹諸詞宗護政」
6. 1886年9月18日「桂笙先生見示大著[王雱]瑀山房紅樓夢詞…」
7. 1886年9月20日「夢畹先生見過小寓、即席賦呈、并請祭政」
8. 1886年9月24日「桂笙、夢畹兩先生招飲三慶酒樓、即席率成、録呈兩先生暨天南遯叟、小藍田懺情侍者、新興山農、寄鷗主人、還読樓主人諸先生吟壇祭政」
9. 1886年9月29日「訪桂馨里陸斐卿詞史、口占示高昌寒食生」
10. 1886年9月30日「小詩一律、録呈小藍田懺情侍者指政」
11. 1886年10月3日「羈棲多感、拉雜成篇、録請高昌寒食生、夢畹生諸吟壇指教」
12. 1886年10月4日「題王松堂先生小樓吟飲図」
13. 1886年10月11日「重九日值余生辰、讌夢畹生、小藍田懺情侍者、還読樓主人、新興山農、種榆山人、吟道人諸吟壇於聚豐園。酒間率成、即請晒政」
14. 1886年10月15日「悼陸小青并序」
15. 1886年10月17日「望夜、風雨凄然、觸緒成章、録請高昌寒食生、夢畹生大吟壇正」
16. 1886年10月20日「耘劬先生招飲泰和酒樓、繼龍山之佳話也。即依耘翁原韻、率成一律、録呈祭正」
17. 1886年10月21日「雨夕悼小青、調酒泉子、録請高昌寒食生大詞宗拍正」
18. 1886年10月26日「小藍田懺情侍者招宴…」(3首)
19. 1886年11月6日「十月初一日、楊臨筮先生、黃少梅詞丈招遊味蕪園、持螯看菊、酒間成此、録請祭政」
20. 1886年11月6日「初二日、雨中西湖花隱同驪睡軒主、種榆山人見訪、賦寄西湖花隱」
21. 1886年11月6日「答驪睡軒主即次來韻、并寄種榆山人乞政」(2首)
22. 1886年11月7日「即事寄玉鋒截雲走馬客、録請高昌寒食生晒政」
23. 1886年11月11日「呈袁翔甫先生、并壽其六十初度」

24. 1886 年 11 月 11 日「送秋詞率成呈政」
25. 1886 年 11 月 18 日「奉酬蘭月樓主、即次元韻呈政」
26. 1886 年 11 月 26 日「與倉山旧主、天南遯叟、高昌寒食生、蓬萊小謫人、懺情侍者、還讀樓主人集於陸斐卿詞史處…」
27. 1886 年 11 月 26 日「故帽殘衫、久淹异地，輕煙澹粉、追憶榷場、□塵一夢、觸感百娛。即用蘭月樓主感旧元韻、率成長句四章、錄呈高昌寒食生、夢畹生諸吟壇政之」(4 首)
28. 1886 年 12 月 4 日「意琴室主招飲王佩蘭眉史家、席間賦呈、即用主人五律原韻、錄請高昌寒食生祭政」
29. 1886 年 12 月 7 日「病脚僧東寄佳作…即請高昌寒食生、夢畹生大吟壇政刊、並乞懺情侍者轉為致意」
30. 1886 年 12 月 8 日「意琴室主重招飲王佩蘭眉史妝樓、即席賦呈」(2 首)
31. 1886 年 12 月 9 日「懺情侍者屬和木犀香館題壁詩、依韻率成、錄請祭政」
32. 1886 年 12 月 16 日「意琴室主設席王佩蘭眉史妝樓、餞思蕙閣主西歸襄陽、賦此送別」
33. 1886 年 12 月 16 日「寒夜調寄南歌子」
34. 1886 年 12 月 16 日「入冬以來、痼疾復作、胃氣不平、頃又痛生心胸、夜不成寐、倚枕呻吟、偶為一律、錄請高昌寒食生祭政」
35. 1886 年 12 月 20 日「送別調寄漁家傲」
36. 1886 年 12 月 23 日「酬梁溪瘦鶴詞人即次來韻」
37. 1886 年 12 月 26 日「奉題徐古春先生乃翁貽硯田」
38. 1887 年 1 月 3 日「蟋蟀在堂、歲云暮矣。閉門養病、輒爾經旬。茗椀藥爐之畔、剪燈欹枕之余、更增萬感縈懷。時復沈吟成句、聊以消遣、借將寄意即呈高昌寒食生吟政」(數首)
39. 1887 年 2 月 3 日「太原黃太孺人五壽詞」
40. 1887 年 2 月 6 日「新正八日、意琴室主招飲、席間率成、即呈郢正」
41. 1887 年 2 月 14 日「廬山旧隱招飲、有詩見示、即次其韻、率成長句、錄請吟正」
42. 1887 年 2 月 14 日「新春客感」

43. 1887年3月1日「醉落魄録請高昌寒食生正拍」
44. 1887年3月6日「奉酬梁溪寄鴻生即次來韻」
45. 1887年3月8日「花朝懺情侍者招集滬上名流於徐園、為百花祝生日、即席成此、以誌雅事」
46. 1887年4月1日「重疊前韻、即酬綺禪庵主陳君瀛伯、并乞懺情侍者代為寄意」
47. 1887年4月1日「相見歡」
48. 1887年4月22日「寓樓偶成、寄懷毗陵醉墨生在龍華會上、録請夢畹生吟壇政刊」
49. 1887年4月24日「奉訪高昌寒食生、閉門養病、漫占俚句、即呈吟正」
50. 1887年4月24日「春夕招同倉山旧主、高昌寒食生、意琴室主、懺情侍者諸君小飲、意琴有詩見示、即依原韻、録呈吟正」
51. 1887年6月12日「客中春感四首、奉和問梅山人原韻、即請諸大吟壇教正」(4首)
52. 1887年6月17日「丁亥夏初、再遊京都、茲復返滬、旅裝甫卸、連蒙高昌寒食生、意琴室主諸吟壇枉過、並有大作見示、即步原韻、録請兩吟壇祭政」
53. 1887年6月29日「蒲月一日、吟香翁將遊蘇州、走筆成此、以送其行、即請桂笙大吟壇政和」
54. 1887年7月1日「滬上留別詩」

如上のように、鷗所は1886年(明治19年)9月から1887年(明治20年)6月にかけて、中国にも数多くの漢詩を残している。その剗削に付せられない遺稿の家に存するものは二千余篇の多きがあったと伝えられる⁽¹⁸⁾。彼は生存中にすでに詩壇の重鎮として名声が高かった。神田喜一郎は鷗所の詩友大久保湘南の批評を引用して、「人と為り骨氣崢嶸にして、敢て苟も人と合ふことを求めず、其詩峭削奇雋を以て自ら一家の調を為す。洵に獲易からざる才人なり。」と鷗所を高く評価している。さらに、鷗所の畏友でもある森槐南の言葉を借用して、「鷗所詩。初以綺麗称。中輒才氣噴薄。珠玉離披。煙雲繚繞。近來所詣。日上登峰造極。真將不可量(鷗所の詩、初めは綺麗を以て称さる。中ごろは輒ち才氣噴薄し、珠玉離披たりて、煙雲繚繞たり。近來の詣(いた)る所、日上り峰に登って極に造(いた)る。真(ほん

とう)に将に量る可からず)」と褒め称えている⁽¹⁹⁾。

その他に、鷗所が35歳の時に書かれた、『読売新聞』では「北条鷗所」⁽²⁰⁾というタイトルの文章が掲載されている。

曩に岡本黄石・鈴木松塘諸翁物故して、今又、杉浦梅潭易簧したれば、尚ほ世に存する老詩家は小野湖山・亀谷省軒、京都の江馬天江位のものに過ぎず、若手に至りては、槐南・青崖・種竹等盛に威を振ひ居れども、激職に在て最も健腕なるは北条鷗所なりとて、新旧両派共に望を属せりと云ふ。但し、鷗所は故森春涛の門人にて新派に属し、曾て春涛より神童を以て目されしもの由。

と師森春涛から神童と目され、激務に追われながら、最も健腕を振るっている若手詩人であり、新旧両派の詩壇から共に期待されているという。

そして、鷗所の死後、次のような記事が書かれている。

詩人北方鷗所氏の事⁽²¹⁾

再昨日を以て登仙したる鷗所北条直方氏は、大審院書記長としては聞こえざりしも、詩人としては一方の覇たるを失われざりき。氏は少時、清国に留学し、上海に於て翰墨に従事したることあり。当時故榎原陳政氏及び現上海総領事小田切万寿之助氏と三才と称せられ、榎原氏の没後、我が国に於て清国の公私筆札に練達するものを挙げれば、現清国公使館書記官中島雄氏と小田切氏を除きては、北条氏の右に座するものなく、榎原氏の後に同氏を挙んと議もありしと云ふ。平生身を持すること淡泊にして功利に近づかず、恬然として文墨を娛めり。其詩は清新にして且つ穩健なる所に於て他人の企及せざる特長ありしは、全く清国文学の素養深かりしに由るならん。其人格に於ても其学殖に於ても滔滔たる名古屋詩人と其列を異にしたる同氏が、壯齡を以て逝きたるは、漢詩界の不幸に止まらずと謂ふ可し。

と官僚として名声が聞こえないかもしれないが、詩人としては一方の覇を唱えているとしている。榎原(井上)陳政や上海総領事小田切万寿之助と合わせて三才と称えられており、平生淡泊にして功利に近づかず、恬然として文墨を娛め、その詩は清新にして且つ穩健で、他人の追隨を許さないと高く評価している。

ちなみに、中国における鷗所の影響について、少々触れておこう。80年代初頭、

夏承燾が日本・朝鮮・ベトナムの詞を収めた『域外詞選』（書目文献出版社、1981年）に、日下部夢香（10首）、野村篁園（15首）、山本鴛梁（6首）、森槐南（21首）、高野竹隱（8首）、徳川樗堂（1首）、北条鷗所（7首）、森川竹筵（6首）と、8人の日本人の詞人、計74首の詞を収録している。そして、鷗所については、「醉落魄・春夜」「昭君怨・秋夕詠懐」「相見歡・閨詞二題」（2首）「減字木蘭花・春夕」「双調南歌子・春雨詞」「前調」という7首の詞を、『日本填詞史話』に依拠しながら紹介している。本書はこのテーマにおける中国初の著書である上、夏承燾が中国で著名な学者であるため、1985年まで5回、4万部も印刷された。学術書としてはよく売れているほうである。

『域外詞選』の後を受け継ぐものとして、河北師範大学中文系の彭黎明・羅姍が『日本詞選』（岳麓書社、1985年）を刊行した。嵯峨天皇以来明治時代までの49名の詞人の195首の作品を収めた本書には、鷗所の詞（7首）も収録されているが、すべて『域外詞選』を踏襲したものである。

その他に、陳福康が『日本漢文学史』（上海外語教育出版社、2011年、下冊、146ページ）で、全面的に神田喜一郎の『日本填詞史話』に基づきながら、鷗所の略歴や詞「醉落魄・春夜」と「尋芳草・暮雪」を紹介している。

要するに、神田喜一郎『日本填詞史話』の影響が大きく、鷗所は現代中国では詩人としてよりはむしろ詞人として扱われていることが分かる。

鷗所の上海時代の活動や具体的な作品については、稿を改めて紹介し、論じたい。

注

- (1) 「詩人北方鷗所氏の事」『読売新聞』1905年7月19日。
- (2) 明治37年（1904）、長崎崇福寺に62名の潁川重寛の門弟によって「潁川重寛先生之碑」が建てられた。門人として題字は中田敬義、撰文は草場謹三郎、書丹は北条直方である。六角恒廣『漢語師家伝』、東方書店、1999年。44ページ。
- (3) 『古今詩文詳解』第142号、明治17年11月。
- (4) 「日使将来」『申報』1889年6月2日。
- (5) 「叙任辞令」『読売新聞』1903年10月2日。
- (6) 「叙任辞令」『朝日新聞』1903年11月10日。
- (7) 「叙位裁可書」明治三十六年・叙位卷十九、国立公文書館。

- (8) 「北条鷗所氏逝く」『朝日新聞』1905年7月18日。
- (9) 『朝日新聞』1905年8月31日。
- (10) 大久保湘南(1865—1908)、名は達、字は雋吉、佐渡出身。明治時代の漢詩人。内務省属官、函館日日新聞記者などをつとめる。明治37年(1904)上京して随鷗吟社を創立し、漢詩文の添削指導をした。著作に『随鷗集』『湘南詩稿』等がある。
- (11) 「到門佳客不相期、一笑茆樓把酒時。過檻風帆皆画意、逐波鷗鳥有涼思。君能人海回頭早、我欲扁舟散髮隨。同是江湖鴻爪旧、仙台夜雨杜陵詩。」「江樓宜待月、清話且留君。秋意白蘋水、暮天蒼狗雲。遠灯漁市早、小雨客帆分。風露涼如此、吟辺酒不醺。」『読売新聞』1904年8月6日。
- (12) 森川鍵蔵編『明治名詩鈔：十二家選』(鷗夢吟社、1915年)所収。165、173、178ページ。
- (13) 「十詩仙追薦会」『朝日新聞』1906年7月2日。
- (14) 『函館竹枝』には井崎幸彦訳注、森屋、1980年、豆本海峡6がある。
- (15) 『北清見見聞録鴻泥』は中国遊歴中の記録だと察する。東武惜紅生が「小紀鴻泥徵旅跡」という鷗所宛の送別詩の一句に、「大箸鴻泥小紀一卷、專誌滬上友朋酬酢之事」と注釈している。東武惜紅生「海上浮查客北条君鷗所奉檄將歸東瀛、以詩留別…」『申報』1887年7月4日。
- (16) 神田喜一郎『明治漢詩文集・略歴』(426ページ)、筑摩書房、1983年。
- (17) これは鷗所の詞の中で最も早い作品であるとされる。神田喜一郎『日本填詞史話』(二玄社、1965)「三九 北条鷗所」322ページ。
- (18) 神田喜一郎『日本填詞史話』「三九 北条鷗所」321ページ。
- (19) 神田喜一郎『日本填詞史話』「三九 北条鷗所」321ページ。
- (20) 「よみうり抄」『読売新聞』1900年6月6日。
- (21) 『読売新聞』1905年7月19日。

付記：本稿執筆に当たって、鄭州大学葛継勇副教授・二松学舎大学佐藤進教授・人間文化研究機構国文学研究資料館入口敦志様・成蹊大学アジア太平洋研究センター客員研究員日野俊彦様に大変お世話になりました。記して御礼申し上げます。

【キーワード】

・明治 ・漢詩人 ・北条鷗所 ・上海 ・裁判所書記